



同じハウス(寮)の同級生たち。
中列左から2番目が筆者



卒業10周年で再会したmorning swimmingメンバー。
右端が筆者

独特の考え方、日本企業の面白さ、日本製品の優秀さなど、他国の友人に聞かれたり教えられたりするうちに、日本に対し、より興味を持つようになった。ナショナルウィークという自国を紹介する文化祭

では、V6の「Made in Japan」の曲に合わせ、日本製品の素晴らしさをアピールするというパフォーマンスをしたこともある。逆にUWC生活で得た海外の考え方や知識を日本の家族や友達に伝えるといったこともしていた。当時は全く意識していなかったが、UWCの生活のなかで「日本の良いものを海外へ」「世界の良いものを日本へ」といった仕事をしたかったと考えるようになっていったのかもしれない。

帰国後、一目で「日本の良いものを海外へ」というコンセプトで仕事をし、現職では「世界の良いものを日本へ」持って来る仕事をしている。複雑なビジネスであるため、難しい場面に直面することもあるが、世界中のビジネスパートナーとともに議論しながら「なんでもやってみる精神」でさまざまなことにチャレンジしている。また自ら課題を見つけてそれに対処していく力は、変化の多いビジネスでは肝となっている。

スピード感のある化粧品ビジネスのなかでもまれながらも学び、仕事ができるのは、一〇代の柔らかな頭でさまざまな価値観と触れ合った経験があるからこそだと思う。この場をお借りしてUWC日本協会ならびに会員企業の方々に感謝の気持ちをお伝えしたい。また、今後も多くの若者にこのようにチャンスが訪れることを願い、そのためにも仕事を通じて社会に貢献していきたい。

▶ Respect the difference ～違いを認め尊重～

も時間の許す限り参加した。日本人メンバーで「唯一の原爆被爆国として核廃絶を訴えたい」と図書館の一角に広島と長崎の原爆に関する展示を並べたこともある。好奇心旺盛であればあるほどいろいろなものを吸収し、また、発信することのできる環境が整っていた。

まさに、この言葉がUWCの真髄を表していると思う。違っていても当たり前。違っていいからこそ面白い。人種、国籍、宗教に限らず、故郷の状況、家族構成、性格、信条など、それぞれの「違い」を認め合い尊重し合うことで、初めて同じ目線で議論できるといえる感覚があった。「共感する」だけでなく、違い

に触れて、「そんな考え方もあったのだ」と多様性を受け入れる。違う意見でも、否定するのではなくその考えの背景を理解する。そんな姿勢で人と向き合うことを学んだ。また、バックグラウンドは違っていても考え方や好きなものが似ていることでつながる仲間がいることも知った。さまざまな軸で自分たちを認識できるようになり、UWCという場所があるアイデンティティーの再構築の場になっていた。

▶ 日本の良いものを世界に、 世界の良いものを日本に

世界に出てアイデンティティーを語る一方で、意外と日本のことを知らない自分を目の当たりにした。日本文化だけでなく、日本人

帰国後、一目で「日本の良いものを海外へ」というコンセプトで仕事をし、現職では「世界の良いものを日本へ」持って来る仕事をしている。複雑なビジネスであるため、難しい場面に直面することもあるが、世界中のビジネスパートナーとともに議論しながら「なんでもやってみる精神」でさまざまなことにチャレンジしている。また自ら課題を見つけてそれに対処していく力は、変化の多いビジネスでは肝となっている。

スピード感のある化粧品ビジネスのなかでもまれながらも学び、仕事ができるのは、一〇代の柔らかな頭でさまざまな価値観と触れ合った経験があるからこそだと思う。この場をお借りしてUWC日本協会ならびに会員企業の方々に感謝の気持ちをお伝えしたい。また、今後も多くの若者にこのようにチャンスが訪れることを願い、そのためにも仕事を通じて社会に貢献していきたい。

違っているから面白い——多様な価値観を認めるといふこと

日本ロレアル デイモンドプランニング

佐藤由記

さとう ゆき

一九九九年—二〇〇一年UWCアトランティック・カレッジ(英国)留学。ヨーク大学(英国)政治経済哲学部卒業、ロンドン大学(英国)経済学修士課程修了。トヨタ自動車を経て、二〇一一年より日本ロレアル勤務。



❖「なんでもやってみる」精神

ウエールズの大自然のなか、スウェーデン人、イタリア人、カナダ人とベッドを並べる四人部屋生活が始まってすぐ、ひどいホームシックに襲われた。「おはよう」ではなく「Good morning」から始まる朝が怖くて、トイレに駆け込んでほこり泣いていた。数週間が過ぎ、当初同じくらしいの英語力だったフランス人の友人が周りと打ち解けていく様子を見て、このままではいけないと「なんでもやってみる」という姿勢に切り替えた。

泣いていた時間は友人との morning swimming によって変わり、寝坊しない限りほぼ

毎日泳いで一日の始まりを迎えるようになった。日本への電話も少しずつ減り、録音した授業のテープを繰り返し聞いて復習する時間に充てるようになった。その甲斐あって、デイスカッションにも参加できるようになり、一番苦手であった経済の授業が一番大好きな授業に変わっていった。

❖何を課題とするかも自分次第

日本の高校では与えられた課題に対しての答えを求められたが、UWCでは自分で取り組む課題やテーマ自体を見つけるところから始まる。経済の宿題は、おのおのが気になる新聞や経済雑誌の記事をピックアップし、そ

●ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会

UWCは、世界各国から選抜された高校生を受け入れ、教育を通じてグローバル人材を養成する国際的な民間教育機関(本部 ロンドン)。UWC日本協会は、UWC活動を日本で普及させるため、経団連の全面的支援のもとに設立され、UWCに派遣する高校生の選考や奨学金の支給等を行っている。奨学金は、UWCの趣旨に賛同する経団連主要会員企業等からの寄附金を原資としており、企業の社会貢献活動として、UWC日本協会へのご入会を検討いただきたくお願い申しあげる。

れについてどう考えるかを発表するというもので、私もユニクロのビジネス例をあげて「アジア諸国からの安値の綿花がもたらす日本企業への影響」を語った。その他にも農作物に課せられる関税からスウェーデンの福祉制度まで多岐にわたり、多国籍メンバーならではの議論が練り広げられた。課題を「与えられる」だけではなく「見つけ出す」「創り出す」感覚は、UWCの他の教科やアクティビティーでも存分に味わえた。

どの授業をとるか、論文では何を議題とするか、ボランティア活動やプロジェクトワーク(自ら企画提案する社会勉強ウィーク)では何をやるかなど、毎日が選択の連続だった。興味のある人がいる限り、クラブ活動も自分たちで企画・運営することができ、私もバスケットボール部や日本食クッキング部などを運営しながら、写真部、マッサージ部などに